



カリキュラムデザインを考える

教育開発支援センター長
教育推進部教授

岩崎 千晶
IWASAKI Chiaki

ニューズレターとウェブサイトを更新しました

本号より、ニューズレターの内容と構成を刷新しました。今年度から年間テーマを決めて発行することにいたしました。今年度のテーマは「カリキュラムデザイン」です。初年次教育やFD(ファカルティ・ディベロップメント)の現場で日々寄せられる問いの中で先生方が苦労されている相談が、授業単体の改善にとどまらず、科目間のつながりや学期・年度をまたいだ設計、つまりカリキュラムに関わるものであることを踏まえ、このテーマを設定しました。自身の授業であれば、目標の立て方や活動の組み方をひとりでじっくり試行錯誤できますが、カリキュラムデザインは複数の教員が関わる営みです。同僚と対話しながら実施することは意義がありますが、円滑に進めていくには工夫が必要になることもあります。そこで本号では、実践事例や研究知見を交えながら、先生方の授業設計・カリキュラム設計に役立てていただける情報をお届けします。

あわせて、教育開発支援センターのウェブサイト (<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/fd/>) もリニューアルしました。FD・SDに関するコンテンツを充実させ、これまでのFDフォーラムや研修の記録に加え、動画コンテンツも新たに掲載しています。授業づくりのヒントや理論的背景を、先生方が必要ときに参照できる場として整備しています。ぜひご活用ください。

さらに今年度から、新学年歴が始まり、オンデマンド配信授業の実施がスタートしました。ウェブサイト (<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/remotecture/>) からは、オンデマンド配信授業に関わる模擬動画、授業設計の方法、システムの操作方法といったテーマを学べる構成になっています。まとまった時間が取りにくい先生方にも活用しやすいよう、なるべく短い時間で視聴いただけるように工夫しています。「まず15分だけ」という気軽な気持ちで試してみてください！

カリキュラムデザインとは何か

「カリキュラム」という言葉の語源は、ラテン語で「人生の来歴」を意味します。学校教育の文脈では、何をどのような順番で、どのような方法で教えるのか、学校活動全体との関わりをどうするのかを明確化するものであり(柴田, 2000)、いわば教育の設計図にあたります。

大学における設計図は、複数の層から成り立っています。大学、学部や学科がCP(カリキュラム・ポリシー)としてどのような方針を掲げ、どのように具体化するか、そして教員が日々の授業実践の中でどう実現するかなど、それぞれの層でカリキュラムは形成されています。カリキュラムの設計そのものは、ワーキンググループや世話人などが中心となって進めることが多いかもしれませんが、設計に関わった先生もそうでない先生も、「このカリキュラムで何を目指しているのか」「自分の授業は其中でどう位置づけられるのか」を同僚と語り合う場があると、設計の意図が実際の授業に生きてくるのではないのでしょうか。

授業設計では、「学習目標」「教育方法・学習活動」「評価・フィードバック」の三つが整合していることが大切とされています(Online Learning Consortium et al., 2020)。この考え方は、カリキュラム全体の設計にも応用できます。学科やプログラムとして「どのような力を育てたいのか」という目標を出発点に、それを実現するための科目の配置や学習活動、そして学びの成果をどう評価するかを考えていくという三つの視点をカリキュラムレベルで整理してみることは、科目間のつながりや学習者の学びの一貫性を考えるうえでのヒントになるかもしれません。もちろん大学の授業は多様であり、科目ごとの独立性が高いことも珍しくありません。まずは「自分の授業は学科の目標とどう関わっているだろう」と少し視野を広げてみることから始めてみてはいかがでしょうか。

教員コミュニティとしてカリキュラムを考える

カリキュラムを実際の授業に活かすためには、設計の内容と意図が、授業を担う先生一人ひとりに届くことが大切です。どれほど丁寧に設計されたカリキュラムであっても、その意図が共有されなければ、カリキュラムは文書の上だけのものにとどまってしまう。

「学びを深める」や「主体的に学ぶ」といった言葉は、カリキュラムの中でよく使われますが、各授業の中でどう具体化するかについては、先生によって受け取り方が異なることもあります。ルーブリックや課題分析図といった授業設計のツールを手がかりにしながら、「この科目で最終的に身につけてほしい力は何か」「そのためにどのような学習活動が考えられるか」を同僚と語り合ってみると、それぞれの授業設計を見直すきっかけになるかもしれません。

実践共同体(Wenger, 1998)という概念が示すように、継続的な対話と協働の積み重ねが、教員集団としての力を少しずつ育てていきます。カリキュラムの見直しにあたっては、「これまでのやり方」と「新しいやり方」をめぐる議論が生まれることもあるでしょう。それぞれの背景にある経験や価値観を尊重しながら対話を重ねることが、学科やプログラムの方向性を共につくっていくことにつながると思います。

本号では、このカリキュラムデザインをテーマに、初年次教育の設計事例や新任教員研修の取り組み、FD・SDに関するeラーニング教材など、多様な角度からの報告と実践を紹介しています。先生方の授業設計・カリキュラム設計の一助となれば幸いです。

【引用文献】

柴田義松(2000)『教育課程カリキュラム入門』有斐閣

Online Learning Consortium, the Association of Public and Land-grant Universities, & Every Learner Everywhere (2020) Delivering High-Quality Instruction Online in Response to COVID-19: Faculty Playbook.

Wenger, E. (1998) Communities of Practice: Learning, Meaning, and Identity. Cambridge University Press.

初年次共通科目に オンデマンド配信授業を どのように活用するのか

教育推進部
教授

山田 嘉徳
YAMADA Yoshinori

2026年度から、学年暦の変更に伴い、授業の構成が「原則14週の対面授業と90分相当のオンデマンド配信授業」へと変わりました。「1回分、何をどう設計すればいいのだろうか?」「学部初年次クラスに共通した学生の学びの基盤づくりにオンデマンド配信授業はどう活かせるだろうか?」そんな疑問や戸惑いを感じている先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

教育開発支援センターでは、昨年度より、学年暦変更の趣旨を踏まえ、シラバスの書き方、動画作成ツールの操作、著作権の取り扱い等、8回にわたって幅広いテーマでFDを実施し、オンデマンド配信授業をどう位置づけるか、授業ごとの創意工夫や活用の可能性を検討してきました。

ここでは初年次生対象の共通教養科目「プロジェクト学習1」の取り組みをご紹介します。担当者同士の意見交換を主としたFD研修会での議論やシラバスの記載内容、先生方へのヒアリングを踏まえて活用パターンを整理しました。図のように、「学びの準備が省察か(横軸)と「汎用スキルの習得か専門・文脈理解か(縦軸)の2軸で捉えることができ、これらの組み合わせから「スキル補完型」「反転授業型」「振り返り・定着型」「フィードバック型」という4つのパターンが見出されました。例えば、初年次教育で複数クラスを担当する場合、共通の動画と学習課題を作成して配付するケースも見られますが、これは「スキル補完型」や「振り返り・定着型」との親和性が高い使い方といえます。

初年次クラスの運営にあたっては、学生の自律的な学習習慣や個々の学習環境への配慮が必要となります。初回授業でオンデマンドの位置づけを説明すること、配信時期を大学生生活に慣れた中盤以降に設定すること、「見て終わり」にならないように動画内の問いかけや次回対面との接続を意図的に組み込むこと、個人で反復・習得すべき内容はオンデマンドに移行すること等、一つひとつの工夫が、学生の主体的な学びを引き出し、カリキュラム全体の質を高める鍵になると考えられます。

オンデマンド配信授業の活用にあたって気になる点がありましたら、教育開発支援センターにお気軽にご相談ください。

<p>汎用スキルを事前動画で習得させ、対面を対話・協働活動に集中させる</p>	 <p>スキル補完型</p>	<p>発表後のコメントや講評を動画で丁寧に届ける</p>	 <p>フィードバック型</p>
<p>対面時間の質を高め、協働・実践に特化した活動を実現する</p> <p>ねらい</p>			
<p>プレゼンテーション、レポート作成、情報リテラシーなど対面前に共通スキルを底上げしたい場面</p> <p>主な活用場面</p>		<p>主な活用場面</p> <p>発表・提出後に個別または全体へのフィードバックを届けたい場面</p>	
<p>専門知識を事前に動画で学び、対面を演習・実践・問題解決に特化する</p>	 <p>反転授業型</p>	<p>数回ごとの学びを動画で整理・復習させ、理解の定着をはかる</p>	 <p>振り返り・定着型</p>
<p>知識の事前定着と、対面での深い学びを実現する</p> <p>ねらい</p>			
<p>専門知識の習得が必要で、対面を実践・議論に充てたい場合</p> <p>主な活用場面</p>		<p>主な活用場面</p> <p>単元の区切りや折り返し地点で、授業ポイントを整理させたい場面</p>	

初年次共通教養科目『プロジェクト学習1』でのオンデマンド活用パターン

注)ただしこれらのパターンは互いに排他的なものではなく、授業目的などによって一部のみを活用する場合もあれば、複数を組み合わせて活用する場合もあります。

初年次教育の設計事例

横浜商科大学における「考える力」の展開

教育推進部
教授

山田 剛史

日本のほぼ全ての大学で初年次教育が導入されて四半世紀近くが経ちます。探究学習を経験した学生の入学、少子化に伴う学習歴の多様化、生成AIやVUCA等による社会環境の変化など、大学を取り巻く状況は大きく変化しています。その中で、初年次教育も大学生生活への適応支援にとどまらず、これからの学び方を支え、社会を見据えた学びへ接続する教育へと再設計するタイミングにあります。

その一例が、横浜商科大学の1年次春学期科目「考える力」です。同科目は、大学基盤科目として、入学前教育、オリエンテーション、1年次秋学期の「基礎ゼミA」、2年次の「基礎ゼミB」や「アカデミックライティング」へと接続する流れの中に位置づけられています。高校までの学びから、大学で求められる問い・仮説・検証・表現へと移行する入口として設計されている点に特徴があります。運営面では、共通の到達目標や学習プロセスを「共通OS」として共有しつつ、各担当教員の専門性やテーマ設定、教材、活動設計を「教員UI」と

して活かしています。具体的には、「問いを立てる」「因果ループ図を描く」「レバレッジポイントを探る」「仮説を立てる」「解決策を具体化する」「他者に伝える」といった流れを共有しながら、題材や授業方法は学生の状況に応じて調整されています。また、教職協働のミーティングを通じて、目的・方針・シラバス、到達目標、課題やリフレクションの位置づけも共有されています。さらに、学生のリフレクションや出欠、課題提出状況等を手がかりに、授業改善や学生支援につなげることも意識されています。

初年次教育を個別授業の工夫に閉じず、入学前教育、情報リテラシー科目、学生支援・教務・情報部門との連携、高等教育センターを核とした教育改善や内部質保証へと展開しようとしている点は、初年次教育を再設計するうえで示唆を与えてくれます。

(謝辞：横浜商科大学商学部総合教養センター・高等教育センターの神崎史彦特任准教授より情報提供いただきました)

新任教員研修「FD Café」を開催しました

教育推進部 特別契約教授 三浦 真琴

教育開発支援センターは4月15日(水)に「新任教員研修FD Café」を開催しました。コロナ禍の時期を除き、毎年、開催しています。

FD Caféは教育開発支援センターが実施するFD活動の一つです。FDとは、もちろんFaculty Developmentのことですが、当CaféではFDをFood & Drink、Free Dialogue、Future Designと読み替え、これらを柱に、普段の飲食のように日常的で自然な立ち居振る舞いで、自由闊達に意見や情報などを交換・共有し、学生と自分たち、そして大学の将来をデザインしようとする場を提供しています。Caféの閉店後、場所を変えてFood & Drinkを楽しめる席もご用意しています。

Caféにご参加いただけるのは、原則として新任教員の先生方ならびに本学ご着任3年目までの先生方です。今回の参加者18名のうち3名の先生方が昨年に引き続き、2度目のご参加でした。Caféの様子をご存知のこの先生方が大いにCaféを盛り上げてくださいました。当日は、Servant Leadershipを疑似体験するアイスメルト*を

経て、「From Teaching to Learning」をベースに、これまでの成功体験や失敗体験、着手はしたものの、まだ問題が解決していない取り組みや、試してみたいけれど未着手の取り組みなどについて、学部を超えて話し合いを重ねました。学生のために工夫を重ねる教員の思惑がなかなか学生に伝わらないこと、反対に私達教師ははたして学生の望みや願いを正しく受け止めているのだろうかなど、学生と教員間に生じ得る認識の差異などをそれぞれに確認し、学習者本位の教育とは何かをあらためて考える、非常に有意義な機会となりました。

参加者からは、「普段はほとんど聞く機会のない先生方の授業に対する想いや考え方を知ることができ、多くのヒントを得られました。」「教員としてのポリシーを持ちつつも、学生への対応に迷いや不安を感じていることを共有でき、それだけでも心強かったです。」「他学部の先生方と交流できる貴重な機会となりました。」などの感想が寄せられ、盛況のうちに終了しました。

*アイスメルト：アイスブレイクでは、砕けたものの溶けきっていない氷の欠片が場に残り、熱を奪ったり、足場に不自由を感じたりすることがあるため、氷を溶かすことを目指す試みのこと。Café master(三浦)による造語。



FD・SDに関するeラーニング教材のご紹介

教育開発支援センターは、授業運営での先生方のお悩みを解消するため、オンデマンドで視聴可能な「FD・SDに関するeラーニング教材」を公開しています。本教材は、教育推進部所属教員が、最新の教育動向や関大生の特徴を踏まえて、様々な視点から「より良い学びの場」を学生と共に創り上げるために必要な事項について解説しています。日々の授業改善のヒントとして、ぜひ積極的にご活用ください。
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/fd/>

WEB
【学内限定公開】



BASIC

- ① 高等教育の質保証と教学マネジメント
- ② アクティブラーニングが求められる理由
- ③ 学生の学習意欲をどう育むのか
- ④ 大学の授業をデザインする
- ⑤ ニューノーマルの学習評価をどう考え、実施するか
- ⑥ シラバス記入の方法



ADVANCED

- ⑦ 青年期の心理と関大生の特徴
- ⑧ ゼミ教育のデザイン
- ⑨ グループワークの授業デザイン
- ⑩ 大規模授業でのアクティブラーニング、フィードバックの方法
- ⑪ 生成AIの教育的利用を考える
- ⑫ 学びを支える学生アシスタント
- ⑬ ルーブリックを活用した評価方法を考えよう
- ⑭ 学生の声を授業改善に活かす方法
- ⑮ 多様な学生への合理的配慮を考える

OTHERS

- ⑯ 教育開発支援センターにおける取組
- ⑰ ICTを活用した授業展開
- ⑱ LMSの基本的な操作方法の説明
- ⑲ 動画撮影、編集、配信ソフト(Panopto)



ティーチング・フェロー(TF)制度 初年度を終えて

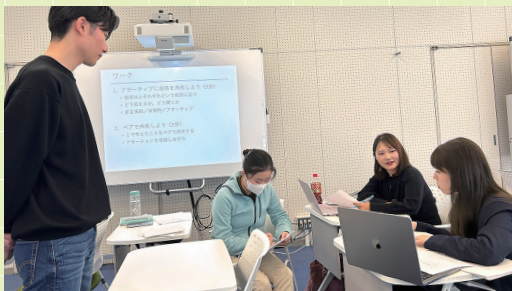
教育推進部 教授 山田 嘉徳

2025年度秋学期より、博士課程後期課程の大学院生を対象とした「ティーチング・フェロー(TF)制度」が試行的に始まりました。大学設置基準等の改正を背景に設けられた本制度は、大学院生が教育の場に立つ経験を通じてキャリア形成を支援するとともに、学部教育の質向上にもつながることを目指しています。

TFは、授業担当教員の指導のもとで授業の一部を担当します。初年度の研修は、オンデマンドによる事前学習(全7モジュール)と対面ワークショップ(模擬授業・マイクロティーチング・ピアフィードバック)、そして活動報告書に基づくフォローアップ研修を合わせた三部構成で実施しました。対面ワークショップでは、教育推進部の教員からも指導助言がなされました。

年度末のアンケートとフォローアップ研修後のグループインタビューからは、ポジティブな声が寄せられました。7名のTF全員が研修を「役立った」と回答し、授業スキルの向上やキャリアへの手応えを感じていることがわかりました。活用された担当教員からも全員が制度継続を支持し、TFの成長を肯定的に評価されています。振り返りにおいては、TFの経験が「教育者としての私」を少しずつ育てていく場として機能していることも浮かび上がってきました。学生に専門知識をどう伝えるか悩んだこと、学生の反応に戸惑ったこと、担当教員との対話のなかで新たな気づきがあったこと等、たしかな学びにつながっているようです。一方で、研修内容と実務とのギャップ、LMSの効果的な利活用など、運用レベルで改善すべき点も見えてきました。また、TFが自分自身の成長実感を高められるようなサポートの充実についても今後の課題です。

本制度の趣旨に鑑みて引き続き大学院生の教育力向上に資する有益な制度となるよう、研修や支援環境のあり方について検討を進めていきます。



模擬授業中のペアワークの様子

対話を通して学びを深める

～ライティングラボの支援と
チューター育成～

教育推進部 特別任用助教 張 暁紅

2025年度におけるライティングラボの個別相談利用件数は1,116件でした。利用後アンケートでは、「来室した目的を達成できた」と回答した学生が84.8%、「まあまあ達成できた」が14.9%であり、多くの学生が支援に満足していました。自由記述には、「分からないところや悩んでいることに真摯に向き合って、解決策を一緒に考えてくださり、助かった」という回答がありました。

ワンポイント講座では、ノートテイキング、要約、引用、プレゼンテーションなど基礎スキ

ルを扱いました。春学期には10回実施し延べ217人、秋学期には6回実施し延べ49人が参加しました。学生から「ノートをとるだけでなく、疑問や考えも思い浮かべながらメモすることが大切だということを学べてよかった」(ノートテイキング)という意見が寄せられました。

春学期は14科目、秋学期は9科目と授業連携を行いました。春学期に学生459名、秋学期に428名に対応しました。また、スポーツ振興グループと連携して、春学期に100名以上の学生がラボを利用しました。

よりよいチュータリングを目指し、ラボではチューター研修にも力を入れました。新人チューターには、ロールプレイを取り入れた研修プログラムを実施しました。定期研修は、春・秋学期の前後に4回行いました。琉球大学の道田泰司先生をお招きし、「クリティカルシンキングをチュータリングにどのように活用するか」をテーマとした研修を行いました(講師：道田泰司先生・張暁紅)。また、留学志望動機へのライティング支援(講師：坂元悠子)や、AIを活用したレポートにどう対応するかを考える研修(講師：岩崎千晶)も実施しました。さらに、関西学院大学ライティングセンターとの共同研修では、当時チューターであった上野直樹さんに「傾聴と質問」をテーマとして研修を実施していただきました。



「クリティカルシンキング」2025年9月19日



「傾聴と質問」2025年7月29日



関西大学
教育開発支援センター
CTL Newsletter vol.48

2026年6月30日 発行
編集・発行：
関西大学教育開発支援センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL : 06-6368-0230
MAIL : ctl-staff@ml.kandai.jp
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

